

## 『夏の花』(原民喜)三部作とその周辺

—陸軍用達商一家の興亡と再生—(二)

岩崎文人

1

「夏の花」を考察の対象とするとき、やはり確認しておかなければならないのは、この作品の成立と発表にいたる経緯である。そこに、「夏の花」をはじめとする原爆文学の戦後文学、あるいは戦後史における特異な位置があるように思える。

この作品が一九四七(昭和二十二年)年の「三田文学」六月号に掲載されるにいたる複雑な事情については、すでによく知られていることだが、遠藤周作、大久保房男、佐々木基一三者の鼎談<sup>(註)</sup>での佐々木基一のつぎのような発言がある。

佐々木 最初の「近代文学」に、「原子爆弾」って題の作品を送ってよこした。だけど、それが載つけられなかった。

遠藤 ああGHQ問題ですね。

大久保 そこが曖昧になってるんで、はっきりさせたいと思う

んですが……。

佐々木 それは、つまり「近代文学」は総合雑誌の扱いの登録になってるわけ。「三田文学」なんかは、ふつうの文学雑誌なんだな。総合雑誌の扱いになると、とても検閲がうるさかったんですよ、当時は。だから、それはすぐに睨まれるから……原子爆弾についてはもう禁止令が出るわけでしょう、載せちゃいけません。「近代文学」は総合雑誌だったって文学雑誌だがね。まあ載せる前にGHQの検閲のほうにいる二世に、誰かを介して……。

遠藤 荒さんでしょ、それ。

佐々木 荒くんだったかな。で読んでもらったんですよ、これ出していいかどうか、ちょっと下見してくれと。そしたら、やはりこれは駄目だったっていうんで、それでまあ遠慮しちゃったわけよ。(略)

大久保 そこに疑問点があるんですよ。当時のぼくの感覚とし

て、事前に検閲を受けにくいのは言論の自由をみずから捨てるような気がしたんです。

佐々木 しかし、もう原子爆弾について総合雑誌では載っつけられないっていう指令があったのよ。

大久保 じゃあそのまま「三田文学」に載せるかっていうと、一部削ったでしょう。

佐々木 ええ、削ってますね。あとで復元しただけども。

荒正人、小田切秀雄、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、山室静などとともに「近代文学」の創刊を企図していた佐々木基一のもとに、原商店の便箋に野を引いて作成した原稿用紙に「原子爆弾」と記された原民喜の作品が届いたのは、一九四五（昭和二十）年の十二月中旬のことである。佐々木基一の発言では、「原子爆弾についてはもう禁止令が出て」いたとあるが、厳密に記せば、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）が占領期間を通じて言論の統制を行うことになった十カ条のプレスコード（「日本新聞紙法」）を発売したのは、一九四五年九月十九日である。プレスコードは言論民主化の指針を示す一方、「直接にせよ間接にせよ公安を妨ぐる様な記事を掲載してはならない」、「連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない」、「連合国占領軍に就いて破壊的批評や占領軍に対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない」などの条は、GHQによる言論統制の根柢となり、特に明

記はされていないものの、とうぜん、原爆に関する報道、あるいは作品化は事実上不可能であった。

ついでに記せば、校正刷りでの雑誌の事前検閲は、一九四七（昭和二十二年）十二月までつづき、それ以降は、「極右極左」二十八誌を除くすべてが事後検閲となった。検閲を担当したCCD（民間検閲支隊）が解散したのは、一九四九（昭和二十四）年十月三十一日のことである。

中央のジャーナリズムから遠い位置にいた原民喜は、もちろん、こうした事情をくわしくは知り得なかった。じじつ、佐々木基一に宛てて、原民喜はつぎのように記している。

拜復 十七日付の端書拝見。なるほど検閲といふこともあったのですね。別便で別の原稿送っておりますから読んでみて下さい。この「雑音帳」は原稿が間にはなかつた時の用意にと思つて清書しておいたものです。

タイトルについてもつぎのような書簡がある。

速達拝見しました。原稿の件については先便で申上げた通りあなたの方の都合に一任します。「新日本文学」へ持つて行かれても結構です。「原子爆弾」といふ題名がいけないなら「ある記録」ぐらゐの題にしてはどうでせうか、それともまだ適切な題があればそちらでつけて下さい。

「原子爆弾」から「夏の花」への改題がいつ、最終的にだれの手

よってなされたのかは、はっきりしない。ただ、「原子爆弾」は、佐々木基一の手元から、鼎談での発言からうかがえるように、「三田文学」編集者丸岡明にわたり、その時点では、「夏の花」と改題されている。検閲の実態をもっとよく知りうる立場にいた「三田文学」編集者丸岡明は、原民喜につきのように書き送る。

「夏の花」拜見しましたが、やはり少々危険のやうです。ご面接の折にお話します。<sup>(註)</sup>

この書信から四カ月後、丸岡明は、ふたたびつぎのような葉書を宛てている。

三田文学第9号を、小説特輯として、例の「夏の花」を思ひ切つて発表してみようと思ひます。再読しましたが、やはりいけないところが少々あるやうに思へますので、校正の時でも結構ですから、そのところを消して載せ度く思ひます。なほ終りの方少々手を入れませんか。「廢墟」の方も終りの方三章が變つてゐました。(傍点原文のまま)<sup>(註)</sup>

こうした幾度かにわたる丸岡明の忠告により、「夏の花」は、けつきよく、以下に示す三方所の削除ののち、さきに記したように、一九四八(昭和二十三)年、「三田文学」の六月号に掲載されたのである。

削除されたのは、つぎのような箇所(□内表記は、のちにふれるが、「原爆被災時のノート」中の対応部分)である。

1 どのやうな人々であるか……。男であるのか、女であるのか、殆ど区別もつかない程、顔がくちやくちやに腫れ上つて、随つて眼は糸のやうに細まり、唇は思ひきり爛れ、それに、痛ましい肢体を露出させ、虫の息で彼等は横はつてゐるのであつた。

〔河岸二ハ爆風ニテ重傷セル人 河ニ浸リテ死セル人 惨タル風景ナリ〕

2 私も暗然として背き、言葉は出なかつた。愚劣なものに對する、やりきれない憤りが、この時我々を無言で結びつけてゐるやうであつた。

3 これは精密巧緻な方法で實現された新地獄に違ひなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとへば屍体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置換へられてゐるのであつた。

引用1は、被爆した原民喜と次兄一家(原守夫と妻良子、その次女櫻子とお手伝い)とが京橋川沿いを北に向かっているときに目撃した人々を描出した部分で、あまりに悲惨な状況であるため削除したものである。引用2、3は、原爆の惨状を記録したものといつてよい「原爆被災時のノート」にはなく、のちに、「夏の花」で

再現、追体験された悲惨に対して書き加えられた原民喜の、時代への批判、憤りであり、ひいては原爆を投じた国、文明に対する直接的な批評ともなっていることからの削除と思われる。

ここで止目したいのは、「夏の花」を論ずる際、多くの論者が引用する2、あるいは3の部分は、じつは、初出時の「夏の花」にはなかったという事実である。しかも、これらは、散文の上で、原爆を追体験したおそらく最初のものであるといつてよい佐々木基一宛書簡<sup>註12</sup>のなかで「地獄といつてもこれは近代化された姿」と明確に記されているものの延長線上にあるものでもある。残されていた原稿をもとに復元された一九五三（昭和二十八）年三月刊行の「原民喜作品集」（全二巻、角川書店）まで、「夏の花」は、現にわれわれが読んでいる文庫本、全集所収の「夏の花」とは異なる作品であった、ということである。第一回水上瀧太郎賞（一九四八年十二月）を受賞したのも、小説集「夏の花」<sup>註13</sup>に所収されている「夏の花」も、1、2、3の部分が削除された「夏の花」であった。

むしろ、いうまでもないことであるが、戦時下の言論統制による伏せ字などと違って、その痕跡すらなかった。そこに、GHQの巧妙な戦略があつたといつてよいが、それは、つぎに示すような、「連合国軍最高司令部民事検閲局」が配布した回状<sup>註14</sup>による。

日本に於て発行せらるる総ての出版物は連合軍最高司令部民事検閲局の検閲を受くるものとす。民事検閲局に於て特に事前検閲

を受くべきものとして指定せられたる書籍、雑誌乃至新聞の発行者はこれから出版物の校正刷二部をその印刷前に検閲のため民事検閲局に提出するを要す。／事前検閲に指定せられざる出版物は総て事後検閲のため提出すべし。／この場合発行者は左記の手續を遵守すべし。／（略）四、発行者は連合国最高司令官の發令せる日本出版法規定に違反せざる記事のみを發行する責任を有す。／五、検閲に關し記述し、又は何等かの技術的方法によつて検閲事項を暗示することは之を嚴禁す。墨による記事の削除、二重刷による変更及び空白の殘置も又之を許さず。特に伏字、例へば点々（……）丸々（○○）ばつばつ（××）の使用は使用目的の如何を問はず之を禁す。

こうした発表にいたる隘路とともに、「夏の花」の成立についても言及しておかなければならない。

「夏の花」は、よく知られているように、被爆翌日の八月七日、原民喜が難を逃れ野宿した東照宮の境内で手帳に記した、「定本原民喜全集Ⅲ」（青土社、一九七八年十一月）所収のものでいえば十一行分と、避難先の八幡村で書き記した七十一行分の「原爆被災時のノート」（以下「ノート」と記す）を下敷きにしてゐる。その「ノート」の八月八日分のなかで、原民喜は、「我ハ奇跡的ニ無傷ナリシモ、コハ今後生キノビテコノ有様ヲツタヘヨト天ノ命ナランカ」と記している。

これは、疎開先の八幡村の二階で、八月六日、八月七日と未曾有の悲惨を記録していき、八月八日、早朝広島駅にむかい、壊滅した広島下の涼しいところまでひとり水を飲み、ひと休みしたときに原民喜の胸中にきざした思いを記したものである。

「夏の花」は、こうした使命感によつて、その年のうちに完成されたものであるが、母と妹とともに白鳥九軒町で被爆した大田洋子もまた、地獄のような光景を目撃し、作家の責任として、はやくに「屍の街」<sup>(注15)</sup>を完成させているのである。そこにはこうある。

「お姉さんはよくごらんになれるわね。私は立ちどまって死骸を見たりはできませんわ。」

妹は私をとがめる様子であった。私は答えた。

「人間の眼と作家の眼とふたつの眼で見ているの。」

「書けますか、こんなこと。」

「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」

原爆文学ほど作家の切実な精神の要求と使命感によつて書かれたものは、たぶん、そんなにはない。また、GHQによる言論統制がなかったならば、おそらく、もっともはやい戦後文学の発出となつたはずである。中村光夫は、つとに「占領下の文学」(「文学」一九五二年六月)と題した評論を発表するが、それは、検閲という制度

の抑圧を視座にしたものではなく、むしろ、占領下に与えられた「自由」を軸に、戦後の文学の卑俗性を指摘したものであった。江藤淳の「閉された言語空間 占領軍の検閲と戦後日本」(「文藝春秋」一九四九年八月)、さらには堀場清子「禁じられた原爆体験」(岩波書店、一九四五年六月)が刊行され、一級の検閲資料であるブランク文庫もマイクロフィルムで見ることができるようになったことにち、戦後文学史は、「占領下／検閲時代の文学」という項目を設け、検閲制度の正負を客観的に見すえる必要がある。

## 2

ところで、「ノート」から「夏の花」への変容のおおよそは、つぎのようである。

突如、空襲、一瞬ニシテ 全市街崩壊 便所ニ居テ頭上ニ  
サクレッツスル音アリテ 頭ヲ打ツ 次ノ瞬間暗黒騒音  
薄明リノ中ニ見レバ 既ニ家ハ壊レ 品物ハ飛散ル<sup>(注16)</sup>

「ノート」に記された八月六日早朝の原爆被投下の瞬間を描いたこの二行は、「夏の花」では、つぎのように、詳述、追体験されていく。

私は廁にゐたため一命を拾つた。八月六日の朝、私は八時頃床を離れた。前の晩二回も空襲警報が出、何事もなかつたので、夜明前には服を全部脱いで、久振りに寝巻に着替へて睡つ

た。それで、起き出した時もパンツ一つであつた。妹はこの姿をみると、朝寝したことをぶつぶつ難じてゐたが、私は黙つて便所へ這入つた。

それから何秒後のことかはつきりしないが、突然、私の頭上に一撃が加へられ、眼の前に暗闇がすべり落ちた。私は思はずうわあと喚き、頭に手をやつて立上つた。嵐のやうなものに墮落する音のほかは真暗でなにもわからない。手探りで扉を開けると、縁側があつた。その時まで、私はうわあといふ自分の声で、ざあーといふもの音の中にはつきり耳にきき、眼が見えないので悶えてゐた。しかし、縁側に出ると、間もなく薄らあかりの中に破壊された家屋が浮び出し、気持もはつきりして来た。

「夏の花」は、基本的には、「ノート」に記述された事実をより詳細に、具体的に記していこうとする意思によつて成立している、といつてよい。時系列も、もちろん、変更の手が加えられることはない。「ノート」に記された人々も、そのまま作品「夏の花」に対応している。が、二、三の加除があるのも事実である。

まず、つけ加えられたと思われる箇所をあげる。

「ノート」では、ごく簡潔に「人川ハ満潮 玉葱ノ函浮ビ来ル<sup>(注17)</sup>」のみ記述されている部分は、「夏の花」では、つぎのような場面となつている。

川の水は満潮の儘まだ退かうとしない。私は石垣を伝つて、水際のところへ降りて行つてみた。すると、すぐ足許のところを、白木の大きな函が流れてをり、函から喰み出た玉葱があたりに漾つてゐた。私は函を引寄せ、中から玉葱を掴み出しては、岸の方へ手渡した。これは上流の鉄橋で貨車が転覆し、そこからこの函は放り出されて漾つて来たものであつた。私が玉葱を拾つてみると、「助けてえ」といふ声がきこえた。木片に取組りながら少女が一人、川の中ほどを浮き沈みして流されて来る。私は大きな材木を選ぶとそれを押すやうにして泳いで行つた。久しく泳いだこともない私ではあつたが、思つたより簡単に相手を救ひ出すことが出来た。

「ノート」に記載された避難行の中で、原民喜が血縁者以外と関わりをもつのは、六日、筏で渡つた京橋川東岸で、肩を貸した重傷の兵士と、翌七日、治療所となつた東照宮に向かう途中、同じく肩を貸した負傷兵のふたりである。この二人の兵士のことは、具体的に、かなりのスペースを割いて記述され、「ノート」と「夏の花」は正確に対応している。が、「夏の花」に描かれた少女救出のことは、「ノート」にはない。

ここで、断定的に少女救出の場面が創作だというつもりはない。が、少なからぬ証左はある。「原爆回想」<sup>(注18)</sup>は短いものではあるが、「ノート」にもまた「夏の花」にも書かれていない情報、たとえば、

廁を出た直後の原民喜の、「私は自分が全裸体でいるのに気づいて苦笑した。何か着るものはないかと妹を顧ると、妹は壊れた押入から、うまくパンツを見つけて渡してくれた」といったその後の動向などを補充してくれるが、そこにも少女救出場面はない。また、原民喜と避難行をともにした嫂（次兄守夫夫人原良子）の被爆体験手記（註13）にも、「鉄橋には貨物列車が止ったまま中から玉ねぎが沢山こぼれ落ちて元気の良い人はそれを丸焼にして皆に配って居たが食べる気もしなかった」とあるのみで、原民喜の行動をかなり細かく記している（一例をあげれば、「ノート」にある、甥文彦の死骸を見つけて、「爪ヲトリテ ココラスグ」と簡潔に書かれている出来事、作品では、「次兄は文彦の爪を剥ぎ、バンドを形見にとり、名札をつけて、そこを立ちさつた」とある箇所は、原良子の手記では「何も包む物もないので、原（注・守夫）は文彦の親指の爪を抜き取り、民喜様が持つて居た手帳を破つて『広島市上柳町六十八番地原文彦』と書いて死体の上衣のボタンにはせて、後髪をひかれる思いで、その場を立ち去る事にしたが、原は『行方も今もわからない人も多い、のに途中で死体を見つけたのはまだ幸いだった』と云っている。馬車屋はまたいつ爆弾が落ちるかかわからないので、早く早くとせきたてられて仕方なくその場を後にした」といった具合である）にもかかわらず、少女救出のことは記載がない。こうしたことから総合すれば、少女を救出するシーン、少なくとも「泳いで」の

記述は創作ではなかったかと思われる。

逆に原民喜の行動を記録したもののうち削除されたものもある。

翌朝目サメテ肩凝ル 広島駅ノ方へ行ツテ見ルニ 広島ノ街ハ  
満目灰白色ナリ 福屋ナドノビルワツカニ残ル 馬一匹 練兵場  
ニサマヨフアリ 駅ニハ少年水兵作業ヲナス 横川ヨリ 汽車  
アル由キイテ帰ル 臥屋ニ帰レバ陽アタリテ暑シ 昨夜ノ黒焦顔  
ノ婦人既ニ死ニ 巡査シラベルニ 呉ノ人ナルコトワカル  
この一節は、八月八日の記述の冒頭部であるが、「夏の花」には、一切記述がない。広島市北部に位置する広島駅から南方宇品までの一面灰白色になった眺望を記せば、三角州によって成立した被爆都市広島島の凄まじい光景をパノラマ的に伝えることになるが、小説では消去されている。

さらにふれておかねばならないのは、「ノート」に記載されている長兄方の甥二人の記述が「夏の花」に一切登場しないということである。さきにふれたように、次兄方の甥文彦は実名でそのまま記されている。次兄方の姪も、華子は「長女」、櫻子は「赤ん坊」として登場する。いずれにしても三人ともに記述されているのであるが、長兄方の甥ふたり、「ノート」では「三四郎ムスビヲ持チテ来ル」（七日）と書かれている三四郎（三男）、「茂ノ姿アリ 馬車ニノル」と記載されている茂（次男）は、「夏の花」では削除されている。こうしたことから、煩瑣になるのを避けたとも考えられる

が、原民喜の長兄と次兄に対する微妙な温度差があったことを示してもいる。

### 3

とともに、やはり問題になるのは、さきに引用した丸岡明も「なほ終りの方少々手を入れませんか。『廢墟』の方も終りの方三章が変つてゐました」と指摘していた「夏の花」の構造・構成のことである。

「夏の花」の終末部は、合名会社原製作所のN（注・今本）が上川立（現・三次市）に疎開していた工場に向かう途中、汽車が衝撃を受け、広島島の異変を知り、つぎの駅からすぐ折り返し、妻を捜し求める場面を描いている。

Nは広島駅から最初に妻の勤務する女学校に向かうが、妻の姿がなく、字品近くの自宅に引き返す。そこから女学校に通じる道を妻をさがして歩いていく。おびただしい死体が横たわっているが、いずれの死骸も妻のものではなかった。

その最終段落は、つぎのようなものである。

Nはいたるところの収容所を訪ね廻つて、重傷者の顔を覗き込んだ。どの顔も悲惨のきはみではあつたが、彼の妻の顔ではなかつた。さうして、三日三晩、死体と火傷患者をうんざりするほど見てすごした拳句、Nは最後にまた妻の勤め先である女学校の焼

け跡を訪ねた。

このNの妻探しの最終場面は、「私は厠にゐたため一命を拾つた」という一文から開始される原爆被災下から、疎開先である八幡村（現・広島市佐伯区）までの避難行、そこに移ってから四五日目に帰つてきた中学生の甥（注・次兄方邦彦）のことが記されている部分までが、「私（注・原民喜）」の視点で描かれ、原家の人々の動靜を描くことに終始しているのに対して、とつぜん、独立した、血縁者外のNの話が加えられていることに起因する。

が、この部分のみを原民喜の初期作品群の掌編小説の一つと考えれば、これはこれとして、すぐれた一編と認めることができる。問題は、なぜ、異質とも思えるものを付け加えねばならなかつたかということである。

「ノート」との対応という点からいえば、とくに付け加えられたというものではなく、Nのエピソードは、「ノート」の最終につきのように記されている。

今本ハ女房ノ死体ヲ探スノニ 何百人ノ女ノ打伏セニナレルヲ起シテ首実檢ヲシタガ腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカツタト云フ「ノート」の「突如、空襲、一瞬ニシテ 全市街崩壊」という最初の一行からこの最後の部分まで、ともかく、事実の記録として、被爆の実相を「夏の花」で追体験したいという原民喜の思いが、作品の構造云々より優位にあつたことはじゅうぶん想像できる。が、



丸岡明の忠告をあえて聞き入れることなく今日のような形にした理由は、やはりあるように思える。

その第一は、冒頭の、これまた掌編小説といってもよい菩提寺の妻の墓に参る場面との呼応だと言える。もちろん、この場面は、「ノート」にはない。原民喜の伝記的事実に即して記せば、妻貞恵の死は、一九四四年九月、まさに、一九四五年八月十五日は「初盆」にあたるわけであるが、「それまでこのふるさとの街が無事かどうかは疑はし」といという思いを胸に抱きながらも、「私」は、八月三日、妻の墓に「黄色の小弁の可憐な野趣を帯び、いかにも夏の花らし」い花を手向け、墓石に水を打つ。

ここには、結核に糖尿病を併発してその生を了えた、妻の確実な日常の死がある。がしかし、Nの妻は、原爆による、死体も発見されることのない非日常の死者なのである。「私」の妻の死がその生の完結した姿であるとすれば、Nの妻の死は、いつまでも完結されることのない、形のない死なのである。原爆による死という悲惨をいっそう際立たせるために、原民喜は、冒頭に妻の墓に参る場面を置き、最終部に、一見不協和とも思えるNの妻探しの場面を削除することなく残したのである。

ついでに記せば、竹西寛子が、「見届け」られることなく死んでいった、「自分の死を全うしていない」被爆者の死の意味を執拗に追及したのが、短篇「儀式」(「文芸」一九六三年十二月)であった。

そこには、それほどの作爲は、あるいはなかったかもしれない。しかし、結果として、冒頭の日常の死と終末部の非日常の死は、呼応し響きあい、「夏の花」の悲劇を鮮やかに指し示すことになったのである。結果としてということとさらに言及すれば、「私」と血縁者がたどったのが広島市東域から北部域、市中央部から西へであるのに対して、Nが妻をさがして歩き回ったのは、広島市の残されたエリア、広島駅(「ノート」)から削除された、八月八日早朝「私」が訪れた場所)から市南域宇品近くであり、Nのエピソードを加えることにより、被爆した広島市のほぼ全域を描くことになったのである。

#### 4

ところで、「夏の花」は、こんにち、「夏の花」三部作として、「壊滅の序曲」(「近代文学」一九四九年一月)、「夏の花」(「廢墟から」(「三田文学」一九四七年十一月)として構成される一連の作品として読まれている。たしかに、「原子爆弾がこの街を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあつた」という一文で閉じられる「壊滅の序曲」、原爆被投下の八月六日から八幡村に避難するまで(とその後の数日)を描いた「夏の花」、疎開した八幡村での生活を綴った「廢墟から」三作は、原爆被投下という事実を軸として、時系列のうえで整然とした連関をもつものである。

原民喜も小説集「夏の花」後記に、つぎのように記している。

「夏の花」「廢墟から」「壊滅の序曲」の三篇は正・続・補の三部作で、「小さな村」「昔の店」「氷花」もそれぞれ三部作とつながりのあるものである。

こころあたりから、「夏の花」三部作という呼称が一般化されたものと思えるが、その方法、内容を詳細に検討すれば、「夏の花」は、まず「廢墟から」との組み合わせ、連関で読むべきであり、その二作をさらに、時系列のうえから、「昔の店」（一九四八年六月）、「壊滅の序曲」、「夏の花」、「廢墟から」、「小さな村」（一九四七年八月）、「氷花」（同十二月）とつづく一連の物語のなかで捉えるべきだと思ふ。

「廢墟から」は、時系列、話柄の連続性のうえからいつても、登場人物のありようから見ても、作者の自注どおり、続「夏の花」といふべきものである。

「夏の花」は亡妻の初盆を迎えようとしていた「私」から書き始められていたが、「廢墟から」は、疎開した八幡村で迎えた敗戦の日、そして亡き妻の一周忌が近づく日々がたとえられることになる。そこにはまた、「夏の花」を書かずにはおられない原民喜の胸中が吐露されてもいる。

私は昏々と睡りながら、とりとめもない夢をみてゐた。夜の灯が雨に濡れた田の面へ洩れてゐるのを見ると、頻りに妻の臨終を

憶ひ出すのであつた。妻の一周忌も近づいてゐたが、どうかすると、まだ私はあの棲み慣れた千葉の借家で、彼女と一緒に雨に鎖ぢこめられて暮してゐるやうな気がするのである。灰燼に帰した広島の家もありさまは、私には殆ど想ひ出すことがなかつた。が、夜明の夢ではよく崩壊直後の家屋が現れた。そこには散乱しながらも、いろんな貴重品があつた。書物も紙も机も灰になつてしまつたのだが、私は内心の昂揚を感じた。何か書いて力一杯ぶつつかつてみたかつた。

作品の構造、構成といった点でも、「夏の花」と「廢墟から」は、とくに終末部に限定すれば、相似形ともなつてゐる。それまで「私」の視点で運ばれてゐた作品が突如Nの妻探しの場面で終わつたと同じように、「廢墟から」もまた、楨<sup>タカ</sup>氏の妻子を捜すエピソードをもつて終わるのである。また、そこには、妻を探して廢墟を歩き回つたNの、「ノート」に記載されていたエピソード「今本ハ女房ノ死体ヲ探スノニ 何百人ノ女ノ打伏セニナレルヲ起シテ首実檢ヲシタガ腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカツタト云フ」という箇所がつかのうちにさりげなく象眼されてもいるのである。

實際、広島では今でも何処かで誰かが絶えず八月六日の出来事を繰返し喋つてゐるのだ。行衛不明の妻を探すために数百人の女の死体を抱き起して首実検してみたところ、どの女も一人として腕時計をしてゐなかつたといふ話や、流川放送局の前に伏さ

つて死んでゐた婦人は赤ん坊に火のつくのを防ぐやうな姿勢で打伏になつてゐたといふ話や、さうかと思ふと瀬戸内海のある島では当日、建物疎開の勤勞奉仕に村の男子が全部動員されてゐたので、一村挙つて寡婦となり、その後女房達は村長のところへ捻ぢ込んで行つたといふ話もありました。横氏は電車の中や駅の片隅で、そんな話をきくのが好きでしたが、広島へ度々出掛けて行くのも、いつの間にか習慣のやうになりました。

こうした緊密なつながりに比して、「夏の花」三部作として一括して論じられることの多い「壊滅の序曲」は、両作品と方法の上で、大きな断層がある。

各々の登場人物を、「夏の花」のそれぞれに当てはめることは可能だが、そこではすべて、長兄夫婦は順一高子、次兄夫妻は清二光子、妹は康子といった具合に固有の名を有しているのである。「私」は正三という名で登場する。

そもそも、この作品は、一人の旅人がかつて過ごしたことのあつた広島を去るにあつて、その街に住む友人（正三）に、「不思議なほど静かな昔の風景」の中に、「最も痛ましい終末の日の姿が閃いた」ことを手紙に書き送る。長い離郷のち、広島に住むようになつた男（正三）は、手紙にある「戦慄」について考えをめぐらせながら、自分は、この街とともに滅び失せてしまふのか、あるいは、生まれ故郷の末期の姿を見届けるために立ち戻つてきたのであ

らうか、そのいずれなのであるかと思ふのであつた」といふ、「夏の花」冒頭部とは異質の、きわめて小説らしい「序の章」にあたる部分が据え置かれて開始される。

たしかに、「電気休みの日、彼は妻の墓を訪れ、その序でに饒津公園の方を歩いてみた」といふ正三の日常の「こまは」、「夏の花」冒頭部に引き継がれることになるし、そしてなによりも、原爆被投下という悲劇に刻一刻と近接していく日々が中心に据えられてはいる。が、「壊滅の序曲」は、近親者の中で精神的に孤立している正三と、順一とその妻高子との葛藤がクロースアップされていき、「夏の花」「廃墟から」とは異なり、もつとも小説らしい方法と骨格をもつものである。

こうしたことから帰納できるのは、「夏の花」三部作とはいふものの、正確には、「夏の花」「廃墟から」をひとくくりとし、原爆文学として扱うべきだということである。と同時に、作品集「夏の花」の後記にあるように、「小さな村」「昔の店」「氷花」を含めた六作品の中の「夏の花」「廃墟から」二作品の位置とその意義を測定する必要がある。<sup>112</sup>

詳細は別稿に譲るとして、いちおうの結論を記すと、これら六作品を「昔の店」「壊滅の序曲」「夏の花」「廃墟から」「小さな村」「氷花」と時系列にしたがつて並び替えれば、近代日本の歩みにより沿つた、陸軍御用達商一家の興亡と再生の物語として読めるというこ

とである。

注

注1 「定本原民喜全集別巻」(青土社、一九七九年三月)

注2 「原子爆弾」という語がはじめてジャーナリズムにおいて出現したのは、一九四五年八月九日付けの「中国新聞」朝刊であり、「非道強暴の新爆弾／戦争努力を一切変革／一億愛心で苦難打開」という見出しの記事中の、「新兵器原子爆弾は遂にわれらの戦争努力の一切を烏有に帰せしめた」という一文でのものであった。

注3 第二条。

注4 第三条。

注5 第四条。

注6 掘場清子「禁じられた原爆体験」(岩波書店、一九九五年六月)による。注3、5の引用も同書巻末資料による。

注7 一九四五年十二月二十八日付永井善次郎(佐々木基一)宛封書。

注8 一九四六年二月十五日付永井善次郎宛封書。

注9 タイトルそのものについても神経質にならざるをえなかった事例として、たとえば、丸木位里・俊の「原爆の図」第一部「幽霊」は、発表時のタイトルは「八月六日」であったが、GHQの弾圧を懸念した日本美術会の要請により、(第三回日本アンデパンダン展)で変更されたという事例がある。(小沢節子「原爆の凶描かれた(記憶)、語られた(絵画)」(岩波書店、二〇〇二年七月)による)

注10 一九四六年七月二十九日付葉書。

注11 同年十一月八日付葉書。注10とともに、広島市立中央図書館蔵。ちなみに、注10にはCCD-J-1424、注11にはCCD-J-2864の検閲スタンプが押されている。

注12 一九四五年十月十二日付永井善次郎宛封書。

注13 一九四九年二月、能楽書林刊。

注14 注6に同じ。

注15 「夏の花」と同じく、被爆年内には完成していたが、プレス・コードのために発表の場がなく、「無欲顔貌」の章を削除し、最初に刊行されたのは、一九四八年十一月(中央公論社)であった。

注16 手帳には、一部句読点が見られる。はつきりしたもののみ読点を付す。手帳に記された記録は、文字の乱れも書き入れ・訂正もほとんどないが、この部分のみ、文として不完全な「人川は満潮」とある。「川は満潮」になり、多くの死体が川に満ちている」という意であろう。

注18 初出未詳。

注19 原良子「ゆうかりの友より被爆体験(NHK)私の訴えたいことはまゆうの花」(一九八一年八月、私家版)。

注20 江種満子「夏の花」(原民喜)「解釈と鑑賞」(一九八五年八月)は、「ノート」に記された食べもの関係の事項が意図的に「夏の花」では削除されていることを指摘している。

注21 モデルとなったのは、内科医師前田孝雄。のち原民喜の妹恭子と再婚。  
注22 「夏の花」を小説集所収の作品群の一つとして、「燃エガラ」まで含めて論じたものに、野中潤「小説集のなかの小説―原民喜『夏の花』論のための覚書」(『学芸国語国文学』一九九二年三月)がある。

— いわさき・ふみと、本学大学院教育学研究科教授 —